
砂糖は二本

小高まあな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

砂糖は二本

【コード】

N8036N

【作者名】

小高まあな

【あらすじ】

彼の好みなら知っている。だから私はそれを準備しておくの。

恋愛（原稿用紙2枚）

彼の好みなら知っている。

ブレンドコーヒー。彼はそこにお砂糖を二本入れる。ミルクは使わない。甘党なのか違うのかわからないと私はいつも思う。

ソーサーにスプーンとそれからお砂糖二本をつける。温かい、いれたてのコーヒーをカップに注ぐ。丁寧に、丁寧に。こぼさない程度に、でも多めにいれたそれを、ゆつくりとソーサーの上に置く。

私は大好きな彼の顔を見て微笑んだ。彼はいつもと変わらない大して愛想のない表情で、私に構わず、コーヒーを手に取った。片手には灰皿。このセンスのない茶色い灰皿はどうかと思う。

台の上にはきっかり二百五十円。いつもそう。彼は几帳面だから、いつも小銭を用意してくる。

「ゆつくりどうぞ」

私は微笑みながらそう言った。彼は私なんかに構わずに、いつもの壁際の席に座る。煙草に火をつける。銀色のジッポで、銘柄はセブンスター。彼の長い指が煙草を灰皿の上で軽く叩くのを目で追う。彼はいつもこの時間に来る。七時五分前。だから私は、いつも彼が来る時間にいれたてのコーヒーが提供できるように計算してコーヒーを落としておく。レジから離れないように気を使っている。

七時十五分。近くのバス停にバスが来る時間になると彼は席を立つ。ああ、今日はもう帰るのか、と残念な気持ちになる。

私は彼のコーヒーの好みだって知っているのに、彼は私について何も知らない。ただのよく行く喫茶店のアルバイト店員なんだろう。でも、それでもいい。私は彼に美味しいコーヒーを提供するだけ。

ドアが開く。

「ありがとうございます。またご利用ください」

私は彼の背中にそう言った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8036n/>

砂糖は二本

2010年10月10日17時24分発行